

☆私の意見

市民の立場から 考えた 神戸の文化を

妹尾美智子

△神戸文化ホール館長△



今までは文化ホールを使う側にいたわけですが、その立場からの提言は、たとえばホール周辺の環境や館内の空調設備の問題など多々あります。やはり文化ホールは神戸市民のものでしたら、これらの問題点をどの程度改善し、いかに使う立場を考えるかが第一の課題といえるでしょう。そして文化をもっと楽しめるものとして市民の間に確立したいですね。

最近の傾向としてキャッツの公演以来、オーケストラの公演や舞台が東京や大阪の大都市だけに集中し、神戸を含めて地方都市への巡演がずいぶん少なくなってきたようです。せっかく神戸には文化ホールという立派な施設があるのですから、大阪ばかりではなく神戸にも迎え入れられるよう具体的に案を作らねばなりません。そのためいろいろな方からお話を聞き、試行錯誤で摸索中の段階です。とにかく一番大切なことは神戸に住む人たちが何を望んでいるかを知り、そして「神戸で育つ文化」を形づくって行くことだと思います。

たとえば具体的なホールの運営にしても、もっと自主事業を増やすべきだという意見もあれば、現状通りの貸館の方針のままにすべきだとする両意見があるわけです。市民の多様な希望もあり我々の判断のむずかしい点だと思えますね。貸館ばかりでも意義がないですから、昨年のエレクトロニクス新能のように文化ホール独自のスタイルを創っていきながら神戸らしい文化を育んでいきたいとは思っています。幸い市内各区には、区民・文化センター等市民が参加できる身近な文化の場が提供されているので、文化ホールとしての質の高さも望まれます。さらに友会組織のあり方も、会費の積立なども含めて考え直し誰も行ける雰囲気と入場料にもっていくべきです。育てる努力をしなければ、市民の中に文化を浸透させることはむずかしいと思います。

はじめての女性館長として、きめ細かな配慮はもちろんのこと、全国レベルという男性的な発想も失わずに神戸での文化づくりに努力したいですね。（談）

随 想



「ベニス朝」／山下 博

トルバドゥールの歌

川原 舜

△音楽集団 ado△



古楽器を演奏する川原氏

昨年神戸のホテルのチャペルで、《中世スペインの音楽》と題する音楽会を開きました。今年も五月の中頃に同所で、《トルバドゥールの歌》のタイトルで演奏会を準備しています。そこで、南フランスの中世に、忽然と出現して詩と音楽の世界に華麗な

花を咲かせ、そうして消えて行った、トルバドゥールのことを少し書いてみます。

Trobador＝トルバドゥールとは、十二世紀の初めから十三世紀の終りにかけての二〇〇年足らずの間、南部フランスのいくつかの地方で、主に貴族の館を舞台に活躍した、一群の詩人兼作曲家のことです。今までに名前がわかっていゝものが一二名、その詩の数は、作者不詳分も含めると二、六〇〇編を超えます。その全てを通して彼等が書いたテーマは、《愛》であり、それも特定の高位の女性に対する思慕の念を歌った。いわば空想的ロマンティック

な《幻想の愛》でした。

二、六〇〇を超す詩の中で楽譜が付いて残っているのは、今のところ二九〇弱ですが、この音楽をどのように演奏したのでしょうか。現存するいくつかの細密画や、十三、十四世紀の文章などの資料から、ある程度はわかっているのは、一人か二人の男性の楽士と、同じ様に一人か二人の男又は女性の歌手によって、演奏されるのが普通であったようです。楽士達が好んで演奏した楽器は、ハープ、プサルテリー、フィドル、リュートなどの弦楽器が多く、管楽器があまり見られないのは、演奏が室内で行なわれたためと思われる。演奏の前にはしばしばトルバドゥール自身が、自作の詩の解説、つまり《解題》をやったようです。そこでは、あることないことない混ぜに、かなり大袈裟に「恋の冒険談」を語りました。これは現代の人々に比べて、はるかに情緒に乏しい中世の人々に、彼等の歌う《幻想の愛》を、少しでも理解してもらうためのものでした。

トルバドゥールの歌は中世の貴族階級の、特に女性の情緒面で、大いに役に立ったように、才能のあるトルバドゥールは、どの館でも歓迎され手厚くもてなされた記録が残っています。

「言葉のロマンティックな意味での《恋愛》は、常に存在していたのではなかった。それは十二世紀の発明である。」

これはフランスの歴史学者アンリ・ダヴァンソンの著書に引用されている言葉ですが、トルバドゥールこそ、この《恋愛》の発明家であつた、といえます。

●音楽集団名「トルバドゥールの歌」第一回公演 85年5月17日(土) PM3:00開演 入場無料 神戸市中央区加納町2-8-3 第2グリーンホテル・チャペル (078) 222-0909 (代)

「私の中の」神戸

筒井 隆子



「神戸」というと、どんな言葉を思い浮べるだろうか？ 港・エキゾチック・おしゃれ・生れ故郷……etc。私はつい最

近まで、このような言葉をぼんやりとイメージの中に描いていたが、ある日有馬温泉行きの電車の中で、「あっ、ここも神戸だったんだ、神戸という街は広いのだ」という事に初めて気が付いた。事程かように「私の中の」神戸というのは、ごく限られた範囲を指していたのではないかと思うが、もしかして人はやはりその行動範囲の中で「我が神戸像」を思い浮べるのかもしれない。これは私だけの独り善がりの見方とあながち言えないのではないかと思ってみたりもする。まあそれ程広い神戸の街ではあるが、「私の中の」神戸について語るならば、お買物はやっぱり神戸という思いがある。神戸でお買物をする、何故かホッとして安心感を抱く。そして神戸の街の空気や風さえもが、女性を美しく見せてくれる、そんな感じがする。絵になる街神戸、そこで女性は主人公になるナンテ……。神戸の街は、ここそこにそのようなステーションを用意してくれている。これは私だけの秘密で、ちょっと

と披露するのが惜しい気もするが、元町通りの方から、大丸へ向かって歩く時、交差点が複雑に入り組んで道路が少し方射状になっている、そこを歩く時、何故かミュージカルのスターにでもなった気分を抱く。大丸のお店の2・3Fあたりからカメラが回って、今や交差点を渡ろうとする私をとらえズームレアップになる。するとカメラがロングに切り替り、音楽が流れる、自動車が待機するなか群舞が始まる……ナンテ光景をなんとなく描いてしまっている。私は将来そんな場面を盛り込んだ、神戸を舞台とするミュージカルを作りたいナンテ等と、そんな夢までもが湧いて来たりしてしまう。舞台装置に恵まれた街神戸。これからは、場面転換した時の神戸の様々な風景、様々な登場人物にも触れてゆき、私のミュージカルを作ってゆきたい等と思ってしまう。将来のミュージカル作りに備えて(?)という訳でもないが作詞・作曲を楽しむながら作っている。

音楽の仲間作り、今流行の

言葉で言うのとネットワーキング神戸の音楽を愛する方々とお知合いになりたいと思うこの頃です。神戸には既にそういったグループも現に沢山あることでしょう。私筒井隆子をお願いしたら、声を掛けてみて下さい。

沢山の授かりもの —この頃の私—

伊勢田史郎

△詩人△



鐘は／学校で 大切なやくめをしている／一時間ごとに／キンコンカンコン／となる／とくにすきなのは／きゅうしよくを知らせるときだ／それと／かえるとき／鐘の音だ／キンコンカンコン／キンコンカンコンこの「鐘」と題された詩は、松が丘小学校三年生の丁子研介君が最近に書いたものだ。作品の中の鐘の音は実にさわやかで明るい。しかもユーモラスな味が、そこはかとなく

匂っていて、読者はふと頬笑んでしまう。

神戸と明石に跨っているマシモス団地の中心部に、神戸新聞文化センター「明舞KCC」は所在する。ここに月二回、隔週の日曜日に出かけるようになって、もう十年を超えてしまった。この「児童詩教室」の子供たちと、詩を軸にして語りあうためだが、詩の本質が何なのか、教えられているのはむしろ当方なのだ、と年月を重ねるほどに実感の度を強くしている。

「ほのぼの」というホームマガジンに「今月の詩」を約四年にわたって書いてこれたのも、今もって若干の童心らしきものを保有しつづけている（どうかかな？）のも、彼氏や彼女たちがハカリでは計り得ない何かを、私に与えてくれているからである。何とか今年中には『おもかじいっぱあい』につづく四冊目の児童詩集を出版したいものと考えている。

KCCの講師として招いてくださったのは、当時のセンター専務理事妹尾太郎氏だ

が、NHK「兵庫史を歩く」の講師として出るようになったのは、作家の杜山悠氏、読売新聞（現常務取締役）の藤野克己氏、それに令弟の藤野泰和氏（現NHK岡山放送部長）の口ぞえによる。歴史好きというだけで、素人の私が兵庫県のおちこちを視聴者の方々と一緒に歩きはじめて、これもまた十年を超える。ポロを出さないように（しゅちゅうトチって、ディレクター氏に迷惑をかけているが）勉強しなければ、という殊勝な思いもあるせいか、おかげさまで諸々の本が少しづつ殖える。

勤務先で「大阪ガス八十年史」を執筆編纂するように、と命じられたのは、かれこれ二年余り前である。昨今どうやら目鼻がつき、この六月には四百ページ余の一寸かわった社史が上梓のはこびとなる。この間、四苦八苦しながら作業をすすめてきたが、長丁場のこの仕事は短気な私を随分と鍛えてくれた。これもまた授かりものである。

●れんさいエッセイ●ペンのうちそと●19

バレッタの一枚の絵

三枝 和 子(作家 え・元永定正)

二月終りに、シシリ島のギリシア遺跡を歩いたついでに、マルタ島へ足を伸ばして来た。と言うより、ちょっと変ったそのツアーに参加して、時折、勝手な行動をとらしてもらって来た。

シシリ島もマフィア騒動で揺れてるし、マルタ島は例のバレッタ空港での一般乗客に二十人もの死者が出たハイジャック事件以来数カ月である。ツアーにでも加わって行かないと、おっかなくてしょうがない。事実、シシリーのパレルモに着いた日は、夜間は外出禁止。ホテルから徒歩で十分もかからないところに刑務所があり、只今満杯、五百人ものマフィア関係者がブチ込まれている、と聞くと、あまり良い気持ではない。翌朝、夢かどうか知らないが、ゆうべ、銃声が二発聞こえた、などと主張する人も出る始末。

しかし旅そのものは平穩無事で、マルタ入国の際、警察の調べがあったが、これもツアーのおかげで難なく通過。おそらく、一生のうちでも一度此処を訪れる、などということはないだろうなあ、と感慨にふけりながら、BC二八〇〇年から一九〇〇年頃に建てられた巨石寺院を見て歩いたり、要塞都市バレッタを海ぞいに散策したり。

なかで、もっとも印象的だったのは、聖ヨハネ

大聖堂礼拝所祭壇に掲げられている一枚の絵であった。

マルタ島には巨岩遺跡の他に、新石器時代からの母神像があると聞いて、これを調べるのが主な目的であったので、この島が聖ヨハネ騎士団の島といわれ、それに関連した素晴らしい文化があることに、最初は興味を持たなかった。おそらく、ツアーに加わらなかつたら、この聖ヨハネ大聖堂へ行つたかどうかあやしいものである。

だから私は、何の予備知識もなしに、この絵の前に立ったのである。

祈拝所の天井からは微かに光がそそがれ、絵のなかから発する光と混じりあっていた。絵の闇は周囲の闇に溶けて、首から血を出して死んでいる聖者を囲む刑執行人と数人の人たち――。

ただそれだけの構図なのに、私は異様な感動を受けた。思わずその場に膝まづいて祈りたいような気持になった。絵を見て、こんな宗教的と言つてよい衝撃を受けたのは、初めての体験だった。

帰りぎわに、画家の名前だけは確かめた。

——カラバッジオ。

美術に詳しくない私としては、知らない名前であった。記念に、と画家の年譜付きの複製が売り

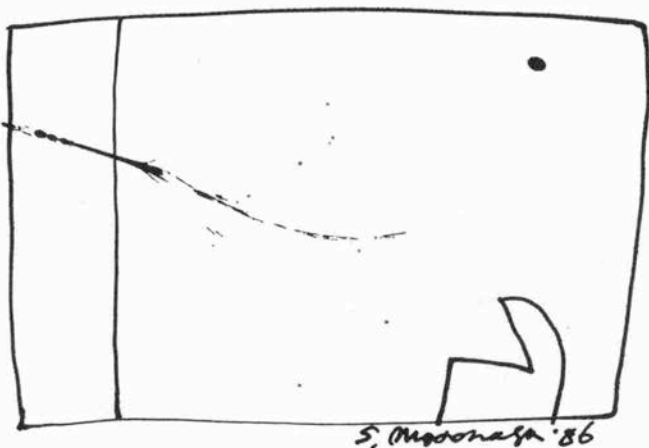
出されていたが、それを見たときに、最初の感動が変質するような気がして、手にはとらないでもう一度祈拝所まで引き返し、目を閉じて、その光のなかの絵だけが意識に残るよう、じいっと睨んで来た。

帰国して数日。日曜の朝。何気なく新聞を開くと、ぱっと、見覚えのある絵が飛びこんで来た。

「カラバツジョ聖ヨハネの斬首」

そういう見出しだった。朝日新聞の「世界の名画の旅」シリーズの一つである。もう一つの見出しには「殺人者の暗い熱情」とある。

何だろう。



読み進むうち、私は、カラバツジョという画家が、ローマで知人を刺し殺し、逃亡中にこの絵を描いたことを知ったのである。「歴史に残る大画家の中で、殺人犯として追われた唯一のひと、カラバツジョ」と記者は紹介している。

私は全く慌ててしまった。あのときの、思わずその場に膝まづいて祈りたくなった奇妙な感動を思い起して、周章狼狽した。無知ほど恐ろしいものはない。知っていたら、また別の鑑賞ができたであらうに。いや、そうじゃない。無知だったからこそ純粹にあの絵の訴えるもののなかに入っていくことができたのだ。

無知な人間を、ほぼ正確に自分と同じ祈りの世界へ導びきこんだ画家の技術を賞讃すべきか、神の力に思いをいたすべきか。とにかく私はそわそわし、新聞片手に家のなかを歩き廻った。

「ねえ、私、マルタ島のバレッタへ行って、この絵の実物を見て来たのよ。凄かったわ。大きな絵でね、ほら、ここに『三六一×五二〇センチ』とあるでしょう……」

すると手伝いに来てくれた妹が、とがめるように言った。

「あんた、マルタ島へ行ったの。あんな危険なところへ——」

実は、シシリー島へ行くと言いだただけで家中が眉をひそめたので、マルタへ廻ると言い出しかねて、ずっと隠したままで発したのであった。

失敗った、バレッタか、とそんなときでも駄ジャレが出そうになったが、そこは神妙に、ひたすら謝まっているうちに、感動を伝えることができなくなってしまった。

●こうべ味な旅②①

庶民の町 平野界隈の味

津村 喬 (評論家)

カット／石阪春生



東京から神戸に移ってきて、四年半になる。ここに住んでいないと、かつての私がそうだったように、観光客向けのきらきらしたところしかわからない。逆にずっと住んでいると、自分の街のそういう色気に鈍感になるようだ。住んで四、五年というのは一番愛着の強い時期なのかも知れないと思う。

三年ほど湊山の下の平野に住み、それから今の再度筋の浄水場に面した借家に移った。ここからだ、山にあがるのが実にたやすく、生活の一部になる。すぐ裏の林山は勝手に「カンカン山」と

名づけ、「うちの三階」と称してしばしばお結びなど持っていく。夜景で有名な「トゥール・ドゥール」もすぐ近くで、ちょっとカクテルなど飲みに行くにはいいが、料理はもうひとつなので、神戸を見おろして食べるには自分で弁当を作ってカンカン山や市草山に足を延ばしたほうがいい。

この、山にあがっても二、三十分、北野に行っても元町に降りても自転車ですら10分足らずという地の利が、神戸という多面的で重層的な街を味わう上でたいへん有利だ。適度な大きさの都会、といえるだろうか。

三宮、元町にまで話をひろげればきりがいいから、ご近所のことから書く。数軒隣にしゃれたペンションのような白い建物があって、これが「デジャヴュ」という喫茶店である。このコヒーはうまく、客を迎える環境演出が考え抜かれているのに少しも押し付けがましくないという得難い店で、わが家の応接間、あるいは手書きで原稿を書くときの書斎代りにしている。「ヴィヴァ」という店も交差点を越したところにあって、二〇なん年型だったかのフォードが店の中にどんとある。

味はもうひと工夫ほしいが、原稿は書きやすい。「フリーケ」の諏訪山店も5分も歩かずに行ける。このケーキは神戸を代表する水準といっている。

再度筋のバス停すぐのところにある「そば喜(よし)」もいい店だ。ごく庶民的な普通の町のそば屋だが、センター街あたりのきどったところよりずっとうまい。とくに最近ラーメンを始めたその出来ばえにはびっくりで、博多だの九州だのと余計なことをいわずに本格的な味を出している。

筋向いに小さな市場があって、四、五人坐れる

カウンターのあるフライ屋さんがある。揚げたてをあれこれと、ごく安く出してごはんとみそ汁をつけてくれる。小さな好み焼き屋もある。この好み焼きというのは東京者には驚異的で、東京にいれば五年に一度食べる機会があるかどうかというものが、この再度筋から平野、石井橋のあたりまでは控え目に言っても五〇メートルに一軒はあって、それぞれ違う工夫をしているのは、「関西の小麦食文化の層の厚さ」とでも言ってみたくなるではないか。

これが家から一〇〇メートルほどの範囲の話だ。平野のほうまで自転車で三、四分かけて行けばまた喫茶店も食べもの屋も多いが、特筆しておきたいのはうどんの「赤穂屋」と定食の「祇園亭」である。大阪でもうまいうどん屋を少しつつ知ったが、関西に来てそのうどん文化の底力を初めて思い知らされたのがこの鍋焼きだった。きつねもうまいし稲荷ずしも楽しみである。てんぷら定食の類もお値打ちである。店をきれいにしてから少し量が減ったとの説もある。「祇園亭」は平野から祇園神社のほうにさがりかけたところにあつて、ゆかり粉をまぶした梅御飯かかやくめしにいくつか惣菜のつく変哲もないめし屋なのだが、驚くほど上品な味で、何よりもその、ちょっと料理好きの太母さんがさりりと用意してくれたという雰囲気かたまりない。

ガイドブックに載るような店も近くにないわけではない。平野からひとつ東の五宮の祥福寺入口には懷石の「祥容庵」があつてたまに客を連れて行くし、まだ敬遠して入っていないが評判の「馳走」も諏訪山の東にはある。「薩摩道場」の諏訪

山店もすぐ近くで、ここは何かと宴会に使わせてもらう。しかしどちらかというと、改まって食へに行くこうした店よりは、毎日のお昼をどうしようかというときに思い浮べるうどん屋や定食屋が本当においしいといえるとき、それこそがその街の文化の底力だといえないだろうか。

こういうことは地元の人を知っていればいいことで、活字で紹介すること自体があまり意味のないことかも知れぬが、いかにも「見せるための神戸」——住むためでなく——に属するタイプの店ばかりがもてはやされているのを見ると、別の視点を出してみたくなる。

神戸の中華料理はとみに評判が高いが、それも神戸に住む中国人が自分で食べる味を守ってきたことに由来する。横浜の中華街はますますきらびやかだが、はつきりいって味は落ちる一方である。「観光料理」になつてしまつてゐるのだ。南京町が年々きれいになるのはいいが、横浜の轍を踏まないではいいものだ。横浜のように集中せず、街じゅうが中華街になつてゐるのがかえつて強みだろう。中国から太極拳の先生をよんでトアロードに住んでもらったとき、周辺の中国語の通じる店を地図にしたら三〇数軒あつてびっくりしたことがあつた。

金さえあればいろいろあるというのは、ただ商品が多様だけである。生活そのものが多様に、ゼイタクでなく豊かでありたいものだと思う。



〈筆者紹介〉

1948年生まれ。早稲田大学中退。在学中から評論家となり、政治、社会、文化から料理、健康までひろく論ずる。「風土食の発見」(北斗出版)は「神戸平野界隈」で神戸の食文化の重層性を分析した。

「音楽を楽しむ」

塩崎明夫

(吹奏楽団プラスホルターニョ)



日本の四季それぞれの美しさについては、いろいろな人達によって言い尽くされていますが、神戸の四季はまたそれらとひと味違った味わいがあり、とりわけこの五月は海が恋しくなる季節でもあります。須磨の海岸へぶらり散歩に行ってみると、初夏の生暖かい風と共に、釣人や砂浜で遊ぶ子供達の声が響き、沖では揺う波に大小色とりどりの船が行きかい、優しく触れてと言わんばかりに淡路島が浮かんでいる。ふと、振り向くと濃い緑一色の山々がそこに迫り、「ああ、まさに神戸」と実感。「そろそろ湯豆腐から冷奴にしようか、ビールの量が増えてくるなあ」などと思いつつ口ずさんでいたのが「歌劇魔弾の射手」のあの朗々としたホルンのメロディーでありました。そうです、あのメロディーが神戸の五月にピッタリだと思いませんか？

四季それぞれを表現した音楽は沢山あり、ビバルディの「四季」はそのものずばりですね。では神戸の四季を感じつつ音楽を楽しんでみるとどうなるでしょう。春にはドボルザークの新世界やデキシーが合うように思うし、夏には冷たいビールなど飲みながらビバルディの夏よりむしろ春。それにずばりイブ・モンタンのラメール、一九五〇年代の映画音楽や、はたまたタイガースの六甲お

ろしなども如何でしょう。秋には一人静かに酒を傾けつつブルックナーのロマンティック、加藤登紀子の歌や日野皓正のトランペットで感傷に更けり、冬は熱燗で鍋をつつきながらマラーで音楽談義に花を咲かせ、そろそろ酔もまわって、グレン・ミラーでダンスを楽しみ、更に出来上って千昌夫の演歌を聴くという……。もうこうなると田辺聖子女史とカモカのおっちゃんの世界。おっちゃん、清洲の酒鬼ころしなぞ飲みながら「ま、どうでもよろしやん、それぞれさまだま楽しんだらええのん」とちがいますか、そこが音楽ちゅうもののええとこで……」とのたまう。

季節感に関係なく人それぞれに音楽の楽しみ方があるでしょうが、私の場合は社会人で編成している吹奏楽団プラスホルターニョなるアマチュアバンドでトロンボーンを吹いて楽しんでおります。吹奏楽と言うと一般的にはどうしても行進曲のイメージになりますが、最近では学生を中心に大変盛んで演奏水準も非常に高く、各地区や全日本のコンクールを始め各団体の演奏会も盛んに行なわれています。ところが、観客層は若い現役のプレーヤーが中心でやはり、まだマイナーな音楽なのかもしれません。しかし吹奏楽はど楽しみ方の多い音楽は他に無いように思うのです。それは、



プラス・ポルターニョ第11回定期演奏会より (1985.6.15)

パッハ、チャイコフスキー、ワグナー等の有名なクラシックはもちろん、スイング、ラテン、ポピュラー、ロック、映画音楽や各国の民謡、琴や尺八との共演、各楽器との協奏曲、日本民謡から演歌、それに吹奏楽のオリジナル曲等々、ほとんどの音楽の吹奏楽用楽譜が容易に手に入るからです。あまりヒットしているとは思えないジャリタレの歌なども、すぐに楽譜が発売されるのです。こんなに多くの音楽を奏者は楽しむ事が出来、それに、まだマーチングがあります。単に演奏しつつ歩けばかりでなく、アメラグのハーフタイムにやっているあれです。神戸の須磨ノ浦女子高ビュールコーズのマーチングなどは芸術品と言ってもいい程、それは美しいものです。

それでは、我がプラスポルの楽しみ方を定期演奏

会から少し紹介しましょう。三部構成ですが、その第二部が大変面白いのです。チャイムと共にカーテンが開いても舞台は打楽器の団員のみ、そのリズム楽器にのって各パートが登場するのです。

まずトランペットが客席で華やかにファンファーレを鳴らし、チューバは「水戸黄門」の主題歌を演奏、終って礼をすると、上を向いていたチューバのベルに葵の御紋が……。フルートは可愛い衣装で白雪姫と七人の小人、踊りながらの演奏です。サクソスは「ルパン三世」ピストルなんか撃ったりしてにぎやかな事。クラリネットは昔懐かしチンドン屋で客席から舞台へ、ホルンは「知っとるケのケ」とテレビそのままに歌い、ユーホニウムは、これ又、客席よりウルトラマン現わるであります。トロンボーンは男性団員四人が女装で登場、楽器を吹くとミニスカートが上ったり下ったりでお客様の大爆笑。順次着替えて五十余名が揃った所へ「北酒場」のイントロ。マイク片手に、細川たかし、よろしく指揮者の登場です。歌うかと思いきやイントロで終りというおふざけ。

オープニングがこの調子ですから、第二部は夢あり笑いありの企画演出でお客様共々、団員も大いに楽しんでます。でも自画自賛ではありません、神戸文化大ホールは毎年、立見が出ているのです。神戸在住のDJ、小山乃里子女士なら「神戸に面白いバンドがあるでエ」と、自慢が又一つ増えるのではないかと、誌上より御案内申し上げます。

吹奏楽団プラスポルターニョ第十二回定期演奏会は五月十日(土)午後六時三十分より神戸文化大ホール。「な、なんと四五〇円!!」



珈琲のみながら…

松竹撮影所50周年記念に
キネマの天地を製作する
野村芳太郎さんに聞く

肌で感じる映画を
じっくり創りたい。

松竹大船撮影所が五〇周年記念に「キネマの天地」を製作する。スタッフは「危険な女」で神戸におなじみの野村芳太郎監督が製作。監督と脚本はご存知「寅さん」のヒットメーカーの山田洋次で、井上ひさしと山田太一が脚本に参画するという大作だ。

浅草の活動小屋の売り子田中小春(藤谷美和子)が、松竹キネマの小倉監督(すまけい)に見出されて蒲田撮影所の大部屋に入ったのは昭和八年のこと。大部屋から女優になってゆく過程での若い活動屋の群像をドラマティックに描こうとしている。この製作に先だって野村芳太郎さんが編集部に立ち寄り本ものの「映画づくり」への情熱を語りかけてくれた。

野村「昔は年に何本か心に残る映画ができて、毎年再上映されて今に残っているのに、この何年間かは、ワーツとした人気をおおたり宣伝したりして、一年たったら忘れられる感じですね。長年映画を作っていることが蓄積にならないといけないのに、今は才能よりも、新しい個性だけを求めているんですね。新しい監督に、その人のもっているフレッシュな部分だけで勝負させて、同じようなものを次々撮らせて……。そうすると消えて行き

ますね。僕らが長年映画界で蓄積したものが生かされない。映画会社というのは安直に売れることだけ考えて宣伝に金をかけるけど、製作費だけに金をかけて宣伝せうに半年くらい見せるのが本当じゃないかと思うんですね。興業に口出しする気はないけれども、作品がもう一つ大切にされていない。結局、それが映画ファンをはじいていると思うんですね。今、アメリカではアメリカの映画自身がそこから出て、一時ワーツと花が咲いたけれど、そこからやとと抜け出して、スピルバーグにしても観客がどんな映画を見たがっているかを僕ら以上に意識している気がするが、日本はそうじゃないですよ。監督でもエキゾチシズムで外国であてようとか。日本の観客にはこういう映画がいいという発想よりも、こういう手で売り出してやろうというところがほの見えて、そういうところに反発もあるわけですよ。こんな流れでいくと、新人の使いすでの時代、才能の使いすでの時代に入っていきますよ。

作っている方にしてみれば、映画というものは、そういうものじゃないんだと。長年下積みでやった連中、息の合った連中が、監督がこういうことをやりたいという、

一生懸命監督の話を開いたり顔を見たりして、それに沿って監督を助けてやろうと、それを上回った能力を発揮してはじめて映画らしい映画が出来てくるわけですね。

今度の映画は記念作品で、予算的余裕もあり、会社の力の入れ方もちがうから、あわてたり騒いだりせずに、じっくり、徹底的に、やるだけのことをやった映画を作りたい、ということで作ってるわけですね。だから今度のは、山田洋次が最初に、こういう映画を作りたいんだとはじめて、井上ひさし、山田太一がいろいろしやべりながらアイデアを出してストーリーを作っていく……」

——当代切っつの才人三人が集まって何をやるんでしょうが楽しみですね。

野村「派手ではないが、けっこう胸を打つ嬉しい映画になるんじゃないかな。今から50年程前の話なんだけど、あの時分の活動屋がいかに純粋で、意欲に燃えて映画を

作っていたか……。その若さと熱気と、あの時分のいつてみればモダンな感覚がストリートに今の若い人に通じれば、若い映画になるんじゃないかな。一種の青春映画をねらってるわけです」

——神戸の町がお気に入りなのでしょうか？

野村「映画の好きな人はどの土地にもいるが、こうやって映画を作っているんだよということを知らせたいし、見る人でも、何も分らないで映画を見るより、こういう人が作っているんだと期待をもって見ると全然ちがう。キャンペーンに行っているいろと話し合うことが、作者者にも勇気づけになるし、見る人にも楽しみになるわけですね。知らない人間が作ったのを見るのちがって、あの人が作った映画だから見てやろうというふうに変わってくる。その人間がどういう考え方をしているのか、どういうことを言おうとしているのか、という楽しみの部分があると思うんですね。

神戸でもこの前からつながりがあるし、そこへ一度行って、今度こういうことをやるよ、と話すのが本当じゃないかと思うんですね。」

——芝居を見た後でも、何人かで見に行って話し合う相手がいなくて面白くないんですね。

野村「見て楽しむことが10%だったら、話し相手がいると20%、作った連中と話し合うと30%と楽しみが増える。それと同じで作る方でもそういうつながりをもった方が楽しみになる、という気がしますね。」

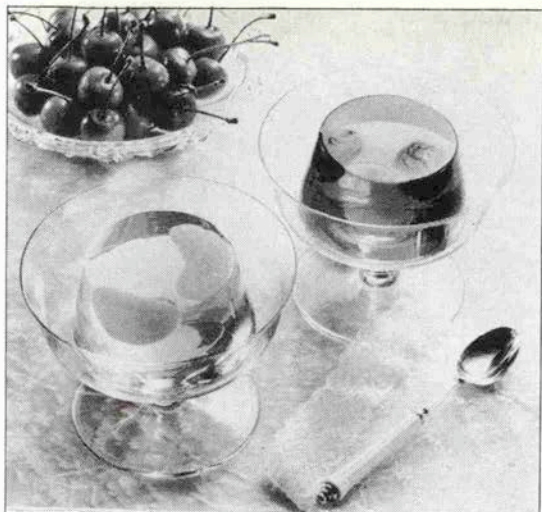
——そういう意味で、これは本当にいい縁ですね。

野村「町の人ときあうと、ロケーションの拠点ができてくる。それがあると仕事やりやすくなるので、大事にしたいですね。」

映画が出来た時にスタッフが全国にワーツと散らばって、話をしなければいけませんね。そしたらすごく勉強になる。自分たちの映画がどう受け取られているかが肌で分かる。そうしたいいいものを作ろうという気になってきたんですよ。ぜひ皆さん応援してください。」



松竹大船撮影所50周年を記念して作られる『キネマの天地』は神戸では8月2日より国際にかつにて公開される予定です。



フルーティなデザート

冷た〜い、ユー・ハイムのデザート

プリン、パインゼリー、オレンジゼリー、
グレープゼリー、キルシュゼリー、
5種類のフレッシュな風味をそのままパックした、
さわやかなデザートです。



ユー・ハイム

「美しさには理由があります。」

(わけ)

ここの一番の美しさ

フォーマルウェア。

フォーマルは一年のうちほとんどがタンスの中。それだけにシミや虫くいが発生しやすくなります。一度袖を通しただけのものでも必ずクリーニングを。



SINCE 1933



本社/神戸市灘区記田町1丁目2-16
078-851-2440

■大阪支社/06-853-1332 ■つかしん店/06-420-3754 ■ロープ・ニシジマ/078-332-2440
■山手店/078-221-2440 ■宝塚店/0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル/078-221-9110

△その77▽

神戸のまちづくりを 縁の下から貢献する 若い技術者たち

嶋田勝次△神戸大学建築学科助教授▽

ここ数年の間に、神戸の街はますます美しくなってきた。磨きがかかって来たといえば言い過ぎだろうか。クリン作戦・グリーン作戦が実施されてから十数年経ったからだけではなく、最近の都市の文化形成、歴史や個性の尊重など、都市問題にあらたな質的方向が訴えられ、それに呼応した事業が次々と行なわれて来ているからである。

その中でも目立つのは、都市の外部環境の物的整備がいくつも開花していることである。

北野坂の歩道整備は、坂道に煉瓦と石の舗装と階段と樹木を配して、単調な道から楽しさをこころみている。私共と神戸の若い技術

者連中との自由な討議の結果である。

京町筋の歩道整備の姿は、神戸市立博物館の開館と旧居留地の景観形成地域指定に合わせて協力した造園技術者にも負っている。

税関線のシンボルロード造成については、いつかこの欄で紹介したが、委員会の提案が役所内外の土木建築の専門家によって具体化されたものである。

最近の南京町は、様門のみならず小広場に東屋も配されて、ヒューマンスケールのポケットパークがつくられた。元町六丁目のフォールパークも同様の新しい空間だが、市と地元の方々とコンサルタントの共同の作業結果である。

神戸・京町筋の歩道整備（上）と南京町の街並整備

神戸のまちづくりは全国的に名を馳せている真野地区は住民運動がみごとに実った好例だが、地区にべったり入り込んで、地元の意見を集約して具体的な

のにまとめあげて来ている神戸の研究所の努力も大きい。

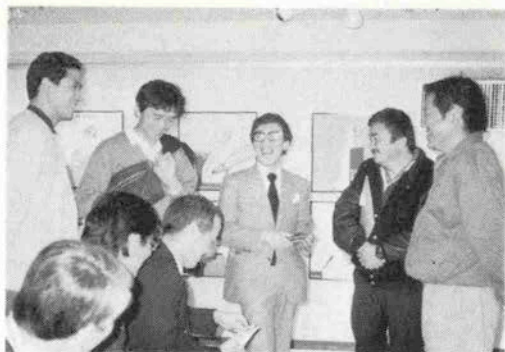
また地域の再開発に一戸一戸の権利者のどろどろした内容を解決して、いくつも三宮東で共同ビル completionに持ち込んでいるのは、神戸の事務所の頑張りの成果である。ポートアイランドや六甲アイランドなどの大規模プロジェクトが展開して来ているのには、役所の考えを目に見える形に一步を進めている神戸の土木建築のグループの一定の役割にもよっている。

これら神戸の新しい都市形成にまっとうに取り組んで来ている民間の小さな専門家集団の果して来ている縁の下のエネルギーの蓄積はみごとである。

都市計画設計研究所・環境再開発研究所・環境緑地設計研究所・地域問題研究所・計画研究所・都市調査計画事務所など、名前だけからはどんな仕事をしているのかイメージは湧いて来ないが、建築・土木・造園などの技術者たちであり、ハードなものやソフトなもの織り込みながら、よりよい都市空間整備に取り組んで来ている新しい専門分野である。

従来のアーキテクトではなく、ランドスケープ・アーキテクト、タウンスケープ・アーキテクト、アーバンデザイナーとも呼ぶべき若い技術者達の誕生なのである。神戸ではそんな人々が育って来ている土壌であることも、ちよっぴり思っていてほしいのである。





●「灘本唯人 in KOBE」展

■座談会

かるいかるい
わが芸術わが人生

早川 良雄 (グラフィックデザイナー)

山城 隆一 (グラフィックデザイナー)

灘本 唯人 (イラストレーター)

三月二十七日から四月一日まで、さんちかホールで「灘本唯人 in KOBE」人間を描きつづけた30年」展が開かれました。灘本先生は神戸のご出身で、山陽電車宣伝部、早川良雄デザイン事務所を経て、現在、フリーのイラストレーターとして大活躍中です。

今日は灘本先生に、早川良雄、山城隆一両先生をまじえ、今回の展覧会の話題を中心に話をお願いしたいと思います。

「灘さんの絵の魅力は癖呆性にあるんですよ」

灘本 私は初め展覧会をやることに反対だったんです。羞恥心がありまして(笑)。

もともとさんちかがリボンして一年目の大きなイベントとして、それもオモチャみたいな展覧会の方がいいのじゃないかというところから私に話が来たのです。

早川 賑やかで、華やかで、軽やかでということですね。

さんちかホールはいい会場ですが、あれだけを埋める量が大変ですね。その点、灘本君は、量は十分。もちろん質も素晴らしい(笑)。

灘本 どうして笑うのですか。その笑いは何か量だけやなあって感じですね(笑)。質のへんは私も心得ているわけで、私は完全にポピュラーな路線を狙っています。両先生のようなアート性のあるものは創れないものですから。

山城 そんなはずはないでしょう。

早川 山城君だって僕だってポピュラーな路線ということでは灘本君と変わりがないわけです。ただね、灘本君というのはね、何か一つのを掴んじやったという感じがするんです。それがポピュラーであろうと何であろうと構わない、とにかく仕事の上で掴んだという感じがする。ところが、傍にいるから言うのですが、山城君はまだ掴み切っていないと思うんです。灘さんは早くも掴んでしまったという感じですね。山城君は何かまだモヤモヤしている。私も実はそういう感じなんです。

僕が言う意味での何かを掴んでしまったというのは、果してこれからいいことなのかどうか、それは別問題なんです。これはすごく真面目なテーマとなりますね(笑)。灘本 早川先生はアイロニーのかたまりみたいなどころ



瀬本 唯人さん



山城 隆一さん



早川 良雄さん

がありまして、長いおつき合いの中ではホンネとタテマエが当然あるわけです。ホンネの部分で、今、おっしゃっているわけだけれど、どう把握すればいいのか、どこまでホンネとして聞いていいのか、迷うわけです。厳しい部分と優しい部分が、どうなんですかねえ。大体、他人に厳しくて自分に甘い方ですからね（笑）。

早川 図星ですなあ（笑）。お互いに自分のことは余りよく分らないですよ。

山城 瀬本さんのイラストに関して言うと、早川君も女を画くけれど、早川君の画く女は観念だと思っんです。

早川 中途半端なんですよ。

山城 日本髪的女を画くけれど、どう見たってオカマが立っているように思える（笑）。昔、祇園の芸者さんと遊んでいた頃に画いていた女からは、明らかに女を感じられた。一つの様式になっていて、それが瀬本さんにすごく影響を与えたと思います。一時期、瀬本さんは早川君の影響をものすごく受けていましたね。

ところが今回の展覧会で、とくに挿絵を見ていますと、ここには明らかに瀬本さん独自のものがあります。

瀬本さんの場合、女性にセクシーな感じがしない。どう言うのかなあ、一種の女独特の、ホラ、あるでしょう、匂うような嫌らしさ（笑）。そういうものを瀬本さんの絵からは感じませんね。これも一つの様式美かも分らないけれど、明らかに早川君とは違う。瀬本さんの女はうまいなあと思うね。

早川 女だけじゃないですね。さっき言った何か一つのことを掴んじゃったということは、表現に右顧左眄したところがないということです。瀬本君だって頭を使うことがあるだろうけど（笑）。

山城 瀬本さんは、頭を使ったときの女はよくないよ。何かイキイキしなくなる。

早川 一切を空にして、ウワーツとやってしまうという、そういう迫力がある。僕の創るものにはそれがないです。これは自分で分るんですよ、やっぱり。

灘本 どういうことですか。

早川 灘本さんの、たとえば挿絵にしたって何にしたって、表現するまでには色々と考えてらうけれど、これからペンを下ろそうかというときには、何て言うかな、観念もなにも無化して、ウワアとやるという痴呆性があるんですね。痴呆なんですよ（笑）。

山城 それが魅力なんです。

早川 神戸人的テレビズムの背後にそれがあります。

「早川良雄の亜流から何とか脱け出したいくて」

山城 灘本さんは男もすごく上手だと思う。ところが二枚目を画くと、どうしても観念で画くようになる。でもね、すごくシニカルなところがある人ですから、人間はよく見ていますね。男の人の馴れ馴れさと言いますか、飄逸さ、人間性みたいなものを、今度、挿絵を見て、実にうまく描いていると思いました。早川君は、男を画いても女を画いても観念なんですね。

早川 薄っぺらなわけですよ。実がない。

灘本 早川先生は最近よく挿絵をお画きになるのですが、今までは早川良雄の挿絵の世界というのはなかったんです。私が早川先生から大影響を受けたのは神戸時代で今から三十年も前です。当時、山陽電車宣伝部にいたのですが、早川良雄デザイン事務所に来ないかと言われたので無条件で行きました。そこから早川先生の仕事を客観的に見ていて、私は大天才だと思いました。天才の作業はこういう風にするものだという、何か作業の部分だけを真似していたときがありました。内容を把握する以前に作業だけをね。

たとえば、せっかく画いたものを一遍雑布で消して、その上にまた画き直すとかね。そういうことのショック、いわゆるカルチャーショックでしょうか、それは何と言つても驚きですよ。

それで今度は自分の世界を創るために、早川事務所を辞めて、さあ、自分が個に還った。これから何をやるか

ということになると、早川先生の亜流しかないわけですよ。だから一時期、「日宣美」のポスターでも、早川に似ていると随分言われたものです。そのときに早川良雄という一人の天才から私が脱却する逃げ口がどこにあるかというのが大テーマだったんです。ちょうど四十二歳ぐらいでした。その頃はまだ少年のような感受性があったんですね（笑）。昭和四十二年に初めて「小説現代」から野坂昭如さんの挿絵の仕事が来たんです。そこで、挿絵の方へ情熱を燃やして行けば、早川良雄から逃げるのじゃないかと思つたわけですよ。

早川 面白い話ですね。

灘本 私の背中には、ベタツと早川良雄がくっついてたわけですよ。惚れ込んでしまった以上は、どうしてもぬぐい取れない部分があるんですよ。それが私なりに自分の道を発見したのが、挿絵だったんです。

早川 先生は、エッセイのカットは画いておられたが、小説の方は手懸けていなかったんです。

山城 それは正解だったですね。

灘本 そこからです、早川良雄から抜け出したのは、完全に抜け切ったときに、ああ独立したと思ひましたね。早川 この話は初めて聞きましたね。しかし灘本さんは挿絵画家になったのではなく、これを一つのイントロにして独自の世界を展開して行ったということですよ。方法論として挿絵を選んだということね。

灘本 早川先生に惚れ込み過ぎたんです。まるで早川良雄の屍みたいで、これでは自分がダメになってしまふとの恐れがあったんです。最近でこそ早川先生は挿絵をじやんじやんと（笑）やっておられるが、当時はまだ、挿絵のジャンルを開拓していなかった。

「軽さのかなしみをつくづく感じますよ」

灘本 山城さんには、今回の展覧会では、とくに挿絵を熱心に見ていただきました。

山城 私はショックを受けました。



「灘本唯人 in KOBE」展には多勢のファンや知り合いの方がつめかけた（さんちかホールにて）

今回、私は灘本さんの挿絵の原画をじっくりと見たのですが、あれほど線がビビッドだとは思わなかったですね。

早川 そう、ためらいがない。だから切れ味が実にいい。それが魅力ですね。

山城 僕は逆立ちしても真似が出来ないですよ。

灘本 小説が面白ければいいのですが、そうでないときはひと苦労ですよ。田辺聖子さんの場合なんか、面白くて絵を画くのを忘れてしまう（笑）。その逆のときは、いかに面白い挿絵をつけるかが一つの使命ですね。しかし面白くないものには、やはり面白い絵は画けない（笑）。それを表現するのは苦しい作業です。もっとも最近では吉田カツさんのように、ストーリーとは関係なく挿絵を画いている人もいますが。そういう時代になりつつあることも事実ですね。

早川 エロティックな小説、「オン・ザ・ベッド」の挿絵を頼まれると、私個人としては興味が有り、画きたい衝動に駆られるわけです。身内に湧く性衝動のままに画きたいと思うのですが、しかしその絵を誰が見るか分らないと考えてしまうと、照れが来て、抑えてしまう。編集者はあからさまなのを喜びますが、抑えてしまう。

灘本 私には、そういうことはありませんね（笑）。

早川 エロティックな部分をあからさまに画く人は、本人は案外そうじゃないんですね。実は僕はものすごくエッチかも分らない（笑）。

灘本 自己偽瞞ですか。先生は挿絵に向いてないのじゃないですか（笑）。

しかし軽やかなものほど難しさがあるんですね。私には関西のどうしようもない軽さがあるんです。ところが日本人は重厚なものに憧れる。私の場合、本質として軽い以外の何ものでもないわけですよ。

早川 それにしても「軽さのかなしみ」をつくづくと感じますよ。

山城 悲しいですねえ。

灘本 それ、僕には分らないですよ。軽さで売っている人に言われたって（笑）。石阪春生さんは僕のことを認めないんですよ。灘本流の軽さを認めてくれない。石阪さんは、とにかく画き込んで行く。私、彼の作品を見て、これ、いいじゃないですか、と言ったんですが、実は未完成のものであった（笑）。それからどんどん画き込んで行くんですよ。石阪流に完成させる（笑）。これで止めたらしいというところから画き始める。これは血です。

早川 重いもの、軽いもの、そのいずれにも本物と偽物、一流と二流がある。ところが作品の格調ということになると、日本人は重いものにそれを感じる。軽いものにも格調はあるのにね。そこにも「軽さのかなしみ」があるんですよ。一流の軽いものをもっと分って欲しいですね。

灘本 私は三流でもいいと思うんですよ。大衆の底辺で仕事を続けて行こうと思っています。高邁な精神は捨てていますよ。

早川 うーん、それが言い切れるのは偉いと思う。

「トンネルを出たらすごい世界が広がっていた」

山城 先日、東京で田中一光さんがパーティでスピーチされていたのですが、亀倉雄策と原弘は理性の分野で、早川と私は感性の分野、自分はこの二つの両親をもっているって挨拶をしてくれました。われわれ二人は母だそうですね（笑）。

早川 気持ちわるいねえ（笑）。

灘本 先輩に恵まれるという幸せは大きいですよ。

山城さんは重厚、しかも軽妙な部分の歌い上げがあります。この両先輩に囲まれて作業を進められるというのは実に素晴らしいと思う。早川先生に呼ばれたのがラッキーだったんですよ。

早川 凄いいライバルをつくってしまっ、私にとっては一生の不覚だった（笑）。

灘本 当時、泥沼だったんですよ。早川事務所は（笑）。早川先生は経済観念はまったくのゼロ。だけど、そういうところでものを創っている素晴らしさ、常識の範囲では考えられない部分というのを見て、本当に素晴らしいと思ったんですよ。天才はどこかが欠落しているんですよ。早川 ところがね、もう一つの自分があったね。欠落していてもいいと言う自分に対して、嫌だという自分。社会人としてのルールは守らないといけないと考える自分があるんですよ。

灘本 それは午後五時までの話ですよ（笑）。

山城 私は神戸は三十年ぶりなんです。今日の昼間、六甲国際ゴルフクラブへ皆さんと一緒に行ったのですが、六甲トンネルにはびっくりしました。何にびっくりしたかというと、ゴルフ場からの帰り、トンネルを抜けた途端、目の前に大都会が広がっているということなんです。トンネルによって違う世界にいきなり入ったという、そのダイナミックさに驚きました。

驚きといえば、ポートアイランドにもびっくりです。

まさに未来都市ですね。

早川 ただポートアイランドの問題は、たとえば赤ちやうちんがないということ。つまりどこにでもある界限的なものが、今後ポートアイランドには出来るのかどうかということ。そこに興味があります。

山城 都市のもつ雑多性がないですね。それがないと街はつまらないですね。

灘本 私はそういうことは考えませんでしたね。逆にすぐく都会的だと思う。センチメンタルな部分がないから余計にそう感じるんですよ。

私にとって神戸は近すぎて客観的に見えにくいところがあります。年に二回、三回と帰って来ますしね。改めて神戸を見るということがないですね。たださっき山城さんがおっしゃったトンネルの話。ばつと目の前に街が広がる。確かに、神戸はすごいなって思いますよ。

（神戸ポートピアホテルにて）



★ポケットの中の神戸シリーズ 《異人館のある風景》

パスポート北野

ファッショナブル神戸・北野ガイド

好評発売中＜ポケット版・200円＞

神戸を彩るチャームポイント・北野。
これは北野界隈の最新ガイドブックです。

<目次>

- 異人館のある風景
- 北野から山に海に
- 北野 3 時間世界めぐりあい
- キタノわくわく面白ニュース

- パスポート北野エクセレントショップ200
- 真珠・宝飾・装身具
- 服飾・洋品
(婦人服飾・紳士服飾・帽子 etc.)
- 生活文化
(家具・インテリア・画廊・ギフト etc.)
- 菓子・パン・喫茶
- 日本料理
- 中華料理
- 世界の料理
(ステーキ・フランス料理・各国料理 etc.)
- ドリンクング
- ホテル・旅館・観光ポイント
- 北野町界隈歳時記

編集・月刊神戸っ子／発行・コミュニティーサービス㈱／神戸市中央区東町113-1 大神ビル9F ☎(078)331・2246